「山椒大夫」論 一 一 一 と 一 情 一 から生じた物語

<table>
<thead>
<tr>
<th>著者</th>
<th>王 晨野</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>雑誌名</td>
<td>日本文藝研究</td>
</tr>
<tr>
<td>巻</td>
<td>一</td>
</tr>
<tr>
<td>号</td>
<td>一</td>
</tr>
<tr>
<td>ページ</td>
<td>一</td>
</tr>
<tr>
<td>発行年</td>
<td>一</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/10236/00026769">http://hdl.handle.net/10236/00026769</a></td>
</tr>
</tbody>
</table>
山椒大夫論

一、はじめに

乃木大将殉死事件の衝撃を受け、歴史小説に転じた森鷹外は「わたしは歴史の「自然」を変更することを嫌って、違和感と苦しみを感じていた。この苦しみを「解せようと思う」。鷹外は歴史小説に関連する新な方法論を試みた。昨年一月に『中央公論』に掲載された。同時に書かれたのは『山椒大夫』に関する執筆経緯などを示した。文章であり、その文章において『山椒大夫』に関する執筆経緯などを示した。}

まだ弟篤二郎の生きていた頃、わたたくしは種々の流派の短い語を集めて見たことがある。中には某の鳥を遂に女の事があかった。わたたくしはそれを一幕に書きたと弟に言った。弟は出来て、成田屋にさせると云った。まだ団十郎も生きていたの
森篤次郎は明治四十年に死去し、九代目国吉郎は明治三十六年に死去した。『栗の鳥を逐う女』に着目した時期は伝説、民話を広く集めた小倉時代であるかどうかは確実な証拠がないが、少なくとも鶴外は明治三十六年前に既に山椒大夫伝説を着目した。もはやこれが伝説であることは既に諸家によって指摘され、定論になったので、純一の悩みは山椒大夫伝説においての鶴外の悩みと見てもよかろう。すなわち、鶴外は山椒大夫伝説を書く形式、すなわち、鶴文が散文か、フロベールに学ばかメーテルリンクに学ぼうかを苦悩していた。結果として、鶴外は「地の文はこれまで書き慣れた口語体、対話は現代の東京語で、只山岡大夫や山椒大夫の口吻に、少し古びた付けただけ」という文体を選び、形式を歴史の自然から脱した「歴史離れ」を取った一方、歴史離れのつもりだったが「なんだか歴史離れが足りない」と正直に告白した。鶴外は文体、或いは表現形式に相当に拘って自信を持ったので、鶴外は物語の年代や孟子王の家系など詳しく考証したのは内容にある「自然」を尊重する行動なので、結果的には「歴史の絹り」から出た出来た。鶴外は歴史離れという「歴史離れ」に関しても明瞭ではなく、「安井夫人」（大正三年三月、『太陽』）や「魚玄機」（大正四年七月、『中央』）は位置づけが曖昧である。要するに、歴史小説において、歴史をどの程度尊重するかという問題がある。
その問題を解析するには、原典との比較研究が不可欠である。従来、鶴の『山椒大夫』と原典の『さんせう太太』の比較研究が多く行われ、説経邪の書文を多様に解析するものである。しかし、『山椒大夫』について、そこには近代的、現代的解釈が鎌光を放っている、鶴の歴史小説を明確に区別する前、その主題を探究するほうが先行すべきではないだろう。鶴の歴史小説における方法論を削愛し、鶴の安産の人物像、地蔵尊の意味、そして鶴が古代歴史学の世界を現代的な意味として何をつながせたかについて研究してみたい。

二、為政者の（個）

鶴は父に会うために旅に出た母、女中の妹竹、妹安寿、弟厨子王四人が人質に遭遇してから運動が一変したところから始まり、厨子王が人質として奴婢を解放した。

鶴の再会は終結するが物語の構成は変則的に人質から開始し、名前後に伝説が人質の事に係っているので、書いているうちに奴隷解放問題に触れることは、『山椒大夫』を読むことを得ない。
『山椒大夫』論

いたのでは、奴婢を解放することを望んで背後にあるもの、すなわち、ほかに目を向けたいことがあった。

『山椒大夫』における奴隷解放問題は、それらの行政的視野との連関のうちに捉えられる性質を帯びている。すなわち、高橋広満氏は戸子王が出世して奴婢解放をしたことを支配被支配の革命ではなく、関係の改善という現実化を求まっているのである。

このため、『山椒大夫』支配者、奴婢でないと差別と被差別国の関係を緩和したいという現実的な意図を持った者が支配者階級と被支配階級の関係を緩和したいという現実的な意図を持った者を登場させた。ならびに、作品にに戻ると、注目したいのは結果的に緩和的な効果をもたらしたのが支配者になった戸子王である。

山崎国紀は戸子王が結末に作った政策を次のように捉えた。

これの為政者の心を必要とするに至った心が必要であることもまた大切なことであったと考える。（中略）

この為政者像への意識は最晩年に発表された『山椒大夫』（大4・1）『中央公論』にても明確にみられよう。この作品の基本的な政治のそれである戸子王を正道と元服以後よせたもののその書き方を示唆的と言える。そして正道が丹後の国守に任ぜられて住む政道はきわめて冠のものであった。
山崎氏は前の国守と尉子王が施した制度を比較して、為政者の「寛」の心が必要と述べ、「正道」の名前を為政者である為政者前の国守と正道だけではない、正道の父である正氏も為政者の一員であった。尉子王は「陸奥徳正氏の子」である。その家柄は、

これはかねて聞きたが、尊い建物に伝わる金蔵堂。百済国から渡ったのを，高見王が持仏にしておいてなさった。

其外，つし王の正氏と云う人の家世は，伝説に平将門の養子と云っている。

民衆の立場に立てた国家の政治体制に反逆した平将門の養子としての尉子王を規定することを避けた配慮である。正氏が「正道」の名前は単に前の

尉子は「面白くなかった」ということについて，長谷川泉氏が次のように指摘した。

尉子は尉子王の家柄について次のように述べた。

民衆の立場に立てた国家の政治体制に反逆した平将門の養子としての尉子王を規定することを避けた配慮である。正氏が「正道」の名前は単に前の

尉子は尉子王の家柄について次のように述べた。

民衆の立場に立てた国家の政治体制に反逆した平将門の養子としての尉子王を規定することを避けた配慮である。正氏が「正道」の名前は単に前の

尉子は尉子王の家柄について次のように述べた。

民衆の立場に立てた国家の政治体制に反逆した平将門の養子としての尉子王を規定することを避けた配慮である。正氏が「正道」の名前は単に前の

尉子は尉子王の家柄について次のように述べた。

民衆の立場に立てた国家の政治体制に反逆した平将門の養子としての尉子王を規定することを避けた配慮である。正氏が「正道」の名前は単に前の

尉子は尉子王の家柄について次のように述べた。

民衆の立場に立てた国家の政治体制に反逆した平将門の養子としての尉子王を規定することを避けた配慮である。正氏が「正道」の名前は単に前の

尉子は尉子王の家柄について次のように述べた。

民衆の立場に立てた国家の政治体制に反逆した平将門の養子としての尉子王を規定することを避けた配慮である。正氏が「正道」の名前は単に前の

尉子は尉子王の家柄について次のように述べた。

民衆の立場に立てた国家の政治体制に反逆した平将門の養子としての尉子王を規定することを避けた配慮である。正氏が「正道」の名前は単に前の

尉子は尉子王の家柄について次のように述べた。

民衆の立場に立てた国家の政治体制に反逆した平将門の養子としての尉子王を規定することを避けた配慮である。正氏が「正道」の名前は単に前の

尉子は尉子王の家柄について次のように述べた。

民衆の立場に立てた国家の政治体制に反逆した平将門の養子としての尉子王を規定することを避けた配慮である。正氏が「正道」の名前は単に前の

尉子は尉子王の家柄について次のように述べた。

民衆の立場に立てた国家の政治体制に反逆した平将門の養子としての尉子王を規定することを避けた配慮である。正氏が「正道」の名前は単に前の

尉子は尉子王の家柄について次のように述べた。

民衆の立場に立てた国家の政治体制に反逆した平将門の養子としての尉子王を規定することを避けた配慮である。正氏が「正道」の名前は単に前の

尉子は尉子王の家柄について次のように述べた。

民衆の立場に立てた国家の政治体制に反逆した平将門の養子としての尉子王を規定することを避けた配慮である。正氏が「正道」の名前は単に前の

尉子は尉子王の家柄について次のように述べた。

民衆の立場に立てた国家の政治体制に反逆した平将門の養子としての尉子王を規定することを避けた配慮である。正氏が「正道」の名前は単に前の

尉子は尉子王の家柄について次のように述べた。

民衆の立場に立てた国家の政治体制に反逆した平将門の養子としての尉子王を規定することを避けた配慮である。正氏が「正道」の名前は単に前の

尉子は尉子王の家柄について次のように述べた。

民衆の立場に立てた国家の政治体制に反逆した平将門の養子としての尉子王を規定することを避けた配慮である。正氏が「正道」の名前は単に前の

尉子は尉子王の家柄について次のように述べた。

民衆の立場に立てた国家の政治体制に反逆した平将門の養子としての尉子王を規定することを避けた配慮である。正氏が「正道」の名前は単に前の

尉子は尉子王の家柄について次のように述べた。

民衆の立場に立てた国家の政治体制に反逆した平将門の養子としての尉子王を規定することを避けた配慮である。正氏が「正道」の名前は単に前の

尉子は尉子王の家柄について次のように述べた。

民衆の立場に立てた国家の政治体制に反逆した平将門の養子としての尉子王を規定することを避けた配慮である。正氏が「正道」の名前は単に前の

尉子は尉子王の家柄について次のように述べた。

民衆の立場に立てた国家の政治体制に反逆した平将門の養子としての尉子王を規定することを避けた配慮である。正氏が「正道」の名前は単に前の

尉子は尉子王の家柄について次のように述べた。

民衆の立場に立てた国家の政治体制に反逆した平将門の養子としての尉子王を規定することを避けた配慮である。正氏が「正道」の名前は単に前の

尉子は尉子王の家柄について次のように述べた。

民衆の立場に立てた国家の政治体制に反逆した平将門の養子としての尉子王を規定することを避けた配慮である。正氏が「正道」の名前は単に前の

尉子は尉子王の家柄について次のように述べた。

民衆の立場に立てた国家の政治体制に反逆した平將門の養子としての尉子王を規定することを避けた配慮である。正氏が「正道」の名前は単に前の

尉子は尉子王の家柄について次のように述べた。

民衆の立場に立てた国家の政治体制に反逆した平将門の養子としての尉子王を規定することを避けた配慮である。正氏が「正道」の名前は単に前の
為政者が民衆の立場に立ったのは、民衆に対する「寛」の心を出発点とした結果からであろう。厨子王と正氏は同じ「寛」の心を持ち、民衆の立場に立った為政者であることが違い少ない。しかし、「大塚平八郎（大正三年一月「中央公論」）のように直接に反逆を描いた鴻外は、この作品では厨子王に関して意図的に民衆の立場に立った反逆的な要素を避けようとした一方、密かに正氏が民衆の立場をとったことを書き込んだ。そのため、「山椒大夫」で

「民衆の立場をとった」正氏は動乱に巻き込まれ、左遷された。その後、厨子王が出世した時、正氏は赦免されたが、既に死んでいた。赦免されたということは鴻外が正氏の行動を肯定すると思われるか、結末に原典のように生きていって厨子王と再会するのではなく、「既に死んでいた」ということは鴻外にとって正氏の行動に何か違和感を覚えたわけではないだろうか。正氏についてそれ以上言及していないが、厨子王の家系を意図的に反逆から避けようとするこ

と正氏が民衆の立場をとっている動乱に巻き込まれたことを結びつけて考えると、恐らく正氏は為政者の立場を忘れた立場に立ったからこそ左遷されても言えるだろう。民衆の反乱行動に何か力を貸してしまうと考えられる。正氏は民衆の

それぞれに対して、厨子王は、物語前半部分で彼の決定に従っていたが、後半になると、特に国守になってから

师実は厨子王に遺言させて、自分で冠を加え、時に正氏が跡所へ、赦免状を持たせて、安否を問いただされました。併し

此便が往った時、正氏はもう死んでいた。（六八五頁）
アイデンティティが強く窺える。そして、前の国守や正氏と比べた後に、厨子王が為政者としてのアイデンティティについて話す。

厨子王はこのような政策と行動をとった。奴婢から経済的な利益を搾取する厨子王は富み栄えた。奴婢の小萩は故郷に帰れた。厨子王の行動は敵と見ても過言ではない山椒大夫である。それに対して、厨子王は民衆の立場に徹底的に立つ、原典のような残酷な復讐行動をとったのでなく、特に山椒大夫に対する恩人としての豊富な民心がある。厨子王は正氏と比べて、民衆の立場に立った為政者である。

また、厨子王の人物像から鴨外の為政者の理想像が窺えるだろう。それは、為政者は為政者の立場を忘れずに、民
三、地蔵尊と「情」

地蔵尊は覚者芸術の象徴として現実的意味を持つが、神秘性溢れた一面がより強く機能している。また「山椒大夫」について、齋藤茂吉は次のように述べた。

つまり、この小説は、作者のいわゆる「歴史離れ」の一例、歴史小説という社会問題に触れることを避け、人間と超人間と、自然と人間との交流、人間老若男女貧富貴賤の<br>
おもかげが、蜘蛛が網を吐き出しては、繰りひろげられて居り、婆の鳥追い伝説のとろこで、終末になっているのだが、

彼は「山椒大夫」での「情」に注意を払ったが、これ以上詮索しなかった。情という人間的な視点から地蔵尊について考えてみたい。物語は地蔵尊について最初にこのように述べている。

母親は物狂おしほに蚊に手を掛け伸び上がった。「もう仕方がない。これが別れたよ。安寿は守本尊の地蔵様を大切におし、どうぞ二人が離れぬように」（六三頁）
母は別れ際に、地蔵尊と護刀を安寿と厨子王に渡した。護刀刀は父からであると明言したが、地藏尊は正氏家系の証明であるゆえ、父からのものであると考えられる。しかし、物語全編から見ると、守本尊は重要なる役割を占めていた護刀刀を「お父様の下さったこと」と言い、安寿に渡した地蔵尊に関しては「お父様の」と強調しなかった。つまり、地蔵尊の系譜は本来の持ち主である父の存在を意識的弱化するのである。護刀刀は機能を喪失したと見てよかろう。そうなると、地藏尊が最初に機能を発揮したのは母が理由である。これは、別れ際にいつも優雅の母が「物狂おし」のように振る舞えたことは母が子に対して持った強い（情）の現である。その（情）が地蔵尊に宿ったのではないだろうか。地蔵尊が初めて力を発揮したのは安寿と厨子王が見た夢である。

——『山椒大夫』 論

九
この場面について、言うまでもなく、彼の夢が超自然的な力を発揮した。原典では夢のことが現実に起こったこととして提供されていた。安寿と厨子王が焼きが押されたのは現実で起こったことである。しかし、厨外の『山椒大夫』では、夢で起きたことが現実と重ね、夢と現実の境界が曖昧になってしまった。これはどうしてだろうか。

母は別れた際に「どうせ二人が離れぬように」と言った。そして、「奴は奴、姉は姉の組に入ると安寿と厨子王を引き別れさせようとした時に、二人は「死んでも别れぬ」。また、厨子王が逃走する時、安寿は「わたしと一話しにする積でしておく」といった。つまり、二人は母の話し通りに二話しにいいようとした。それで、母の言葉に従って、安寿と厨子王は母に会いたいという夢が焼きをされた夢と守本尊を超え、子を守った。

守本尊が再び力を発揮したのは闇白の養女の病気を治した時である。闇白が厨子王のことを知ったのは夢からであつた。国分寺でその夢を見たのは仏守本尊母の（情）による力という系譜で解釈できるであろう。しかし、もう一
つ注目しなければならないことは、その時点で安寿が亡くなったことである。

それを解く鍵は、「お前一人ですることを、わたしたしあとはするつもりでしておくれ」と、守り本尊を弔いに渡して、「こ
の地蔵様をわたしたしあにとっては、守り刀といっしょにして、だいじに持っておくれ」という、そのセリフに詰んでいるだけ。

それ故、守り刀を「いっしょに」父母の行方を尋ねることができ、信じていたに違いない。

と、遠藤哲氏は、安寿は死によって地蔵尊に生を転じ、地蔵尊が身替わりになったと指摘した。もしその論に沿って安
寿の転生によって地蔵尊が力を発揮したという視点から考えれば確かにそうである。しかしこうなると、地蔵尊が初
めて力が発揮することが不可解になる。ここで、「この地蔵尊をわたしたしあ、守り刀といっしょにして、だい
じに持っておくれ」という安寿の言葉は、「安寿は守本尊の地蔵様を大切におし。どうぞ二人が離れぬように」という母の言葉と重なる。

応じた母の言葉が、守本尊に宿った。したがって、地蔵尊二度の力は安寿の転生というより、安寿が「情」を託した
安寿の最後についてのような描写がある。

後に同胞を探しに出た、山椒大夫一家の討手が、この坂の下の沼の端で、小さな籠を足持ち、それは安寿の隠れてあっ
安寿の死亡に関して明確に描写されていないが、厨子王が「姉が由良で亡くなりました」と言った根拠は入水に残した小さな篭履である。もし安寿の入水は追手を厨子王から注意を引き寄せるようすると、安寿が弟を守りたいという安寿の思いがまだ世に残っているであろう。その篭履は安寿不在の象徴でありながら、安寿は不在であるとしても、安寿の思いがまだ世に残っている。

つまり、安寿は不在であるとしても、安寿の思いがまだ世に残されている。

《情》、姉が弟への《情》は地蔵尊によって力が発揮されたというであろう。

「地蔵尊が最後に力を発揮した場面を見てみよう。」

地蔵尊が最後に力を発揮した場面を眺めていた。

手には四本の鎧を持った。剣を在にして、地蔵尊は入水しても魂がまだ世に残っている。

地蔵尊の力は母から子への《情》という形式で成し遂げられた。
二度目の変貌で安寿は、「観光で總是紅が差して、目が赫いている」とも言う状態になった。これは厨子王と同じく山で柴切りをした後の行動から考えられる。父親に会わせる喜びの流露である。四方に会える、妹とも一度一緒に変わるという未来のことを想像して、厨子王は「目が赫く」ということが想像される。安寿は父親に会いたいという事で話している時三郎に聞かれた。三郎は残酷な人なので、残酷さが夢に投影された。そして、現実の残酷な人ならば、安寿の目が輝いていることも同じ理由からであろう。もう一度振返ってみると、安寿は父親に会いたいということを話している時三郎に聞かれた。
断絶された安寿が見つめているのは空間を越え、前より遠かな存在になった両親であろう。即ち、安寿は父母への情から生じた希望が断絶されたからであるため「目は遠く，遠い処を見詰めている」と表出され，姉子王を逃走させ父母に合わせる希望が持ち上がったため「目が赫いている」を表出された。素朴な「情」は「目」を通じて流出した。そして，その「情」が安寿変貌の原動力となった。

目の表現から見ると，前の変貌とつながりがあるとも言えるだろう。それに，「亳光」という表現について話した時，「此時庄兵衛は空を仰いでいる喜助の頭から亳光がさすようにあった」「高瀬舟」に喜助が知足について話をした時「此時庄兵衛は空を仰いでいる喜助の頭から亳光がさす」という記述が，「亳光」という表現は智慧の象徴である。さらに，逃亡当日に以下のような会話がある。

「おう，喜助が本当だった。安寿は善い人で，きっとお前を懐しくくれるからね。」

「ええ，それについても検討しました。」

「ぞうですね。姉子さん，のすごい仰れる事は，まるで神様か仏様が仰るようなものです。わたしが考えを極めました。なんでも姉子さん，」

「だから，喜助が本当だった。安寿は善い人で，きっとお前を懐しくくれるからね。」

「おう，喜助が本当だった。安寿は善い人で，きっとお前を懐しくくれるからね。」

「ええ，それについても検討しました。」

「ぞうですね。姉子さん，のすごい仰れる事は，まるで神様か仏様が仰るようなものです。わたしが考えを極めました。なんでも姉子さん，」
「きょう」という言葉は、安寿が剣子王逃走当日の異常性を言説している。つまり、このことを安寿三度目の変貌と言えるだろう。そして、「毫光」という表現は安寿が「悟り」を得た表現である。安寿の「悟り」として、「お寺の山門が黒に染まる」と言わし安寿はそれを断言できるだろうか。同日に安寿は「人の運が変わるものの、善い人に逢わぬにも限らない」（六七頁）と言った。つまり、「運が開ける」ということは「善い人に出会い」ということと因果関係がある。（注）これは「毫光」の能力が生じ、「善い心を蘇す」、善の心を信者＝盗少年という順番で移り、少女が救われたという話である。物語で、「毫光」は剣子王の地蔵尊を置いた時のことである。

次は律師が剣子王と別れた時の事である。山城の朱雀野に来て、律師は現堂に休んで、剣子王に別れた。「守本尊を大切にして住け、父母の消息はきっとと知れる」（六八三頁）と言い聞かせて、律師は踵を旋じた。亡くなった剣子王と同じ事を言う坊主だと、剣子王は思った。（六八三、六八四頁）
五、おわりに

「山椒大夫」論

原典である伝説は長時間を経て、多くの形式を再構成され、物語の細部に多少の対比があるが、「山椒大夫」新作

『山椒大夫』と名付けた。原典で「山椒大夫」と名付けられたのは、驚き山椒大夫が最後に処刑され、

『山椒大夫』論
悪が滅されたことによって、鶴の大腸が軍で付かれたと思われる。しかし、鶴は山椒大師の結末を改編し、命の断絶を意味する、尾形俊氏は、鶴の大腸の結末に、より表現された現代的な意味を象徴しているのではないかだろうか。

また、鶴は伝説のことを「竜の鳴を逐う女を」と呼称したため、物語で鶴にとって一番印象深いのは最後に描かれた、鶴の大腸の身分について意図的に複雑な要素に至ることを避け、前の国守、正氏と比較的歴史の中でそれ鮮明に存在しているであろう。

また、「山椒大師」は「積極的」と彼のアイデンティティに着眼し、理想に為政者を描いた。この理想化された為政者像は、「個」という血縁関係から発した「情」以外、小萩から安寿への「情」も感情できる要素である。母から子の「情」、子から母への「情」を払うべきことがある。それは物語全編に鶴人もかななり着眼した「情」である。母から子の「情」、子から母への「情」も複雑な要素である。
二郎の善意な（情）など、このような朴素な（情）が存在する限り、苦しんでいる人々の些細な救いになるであろう。それに、地蔵尊の力は母から子への（情）から出発し、子から母の（情）まで返ってきた。非母の（情）を霊験という形式で表現させる半ば（情）は、人間の力に及ばないことを霊験という形式で表現させる半ば（情）の証明ではないだろう。その（情）こそが（情）の真髄である。

＜前記のように、＜情＞にも注目することになったが原因であるかもしない。今後は鶴外が＜情＞への視線を考慮に入れつつ、他の歴史小説について考察してみたい。＞

【注】
(1) 本編はすべて『山椒大夫』『鶴外全集』第十五巻、岩波書店、昭和四十八年から引用したものである。また、すべての引用は、原則として新字に改め、ルビを省略した。
(2) 鴻外日記大正三年二月二日。十日条の次のように記述した。
(3) 十日晴。山椒大夫は当時、陸軍省に乾関。鳴尾大臣に官第に面会して本復を祝す。山椒大夫を師導しやすい。歴史的観と歴史観の文を草して佐々木信綱にわたす。心の花に乗せるためなり。